

島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS



CONTENTS

- 2・3 秋の企画展「たたら製鉄と近代の幕開け」特集
- 4 学芸員通信 5 博物館だより／まいぶんセンター通信
- 6 古代文化センターだより
- 7 山陰歴史回廊「米子市立山陰歴史館」 8 れきはくごよみ

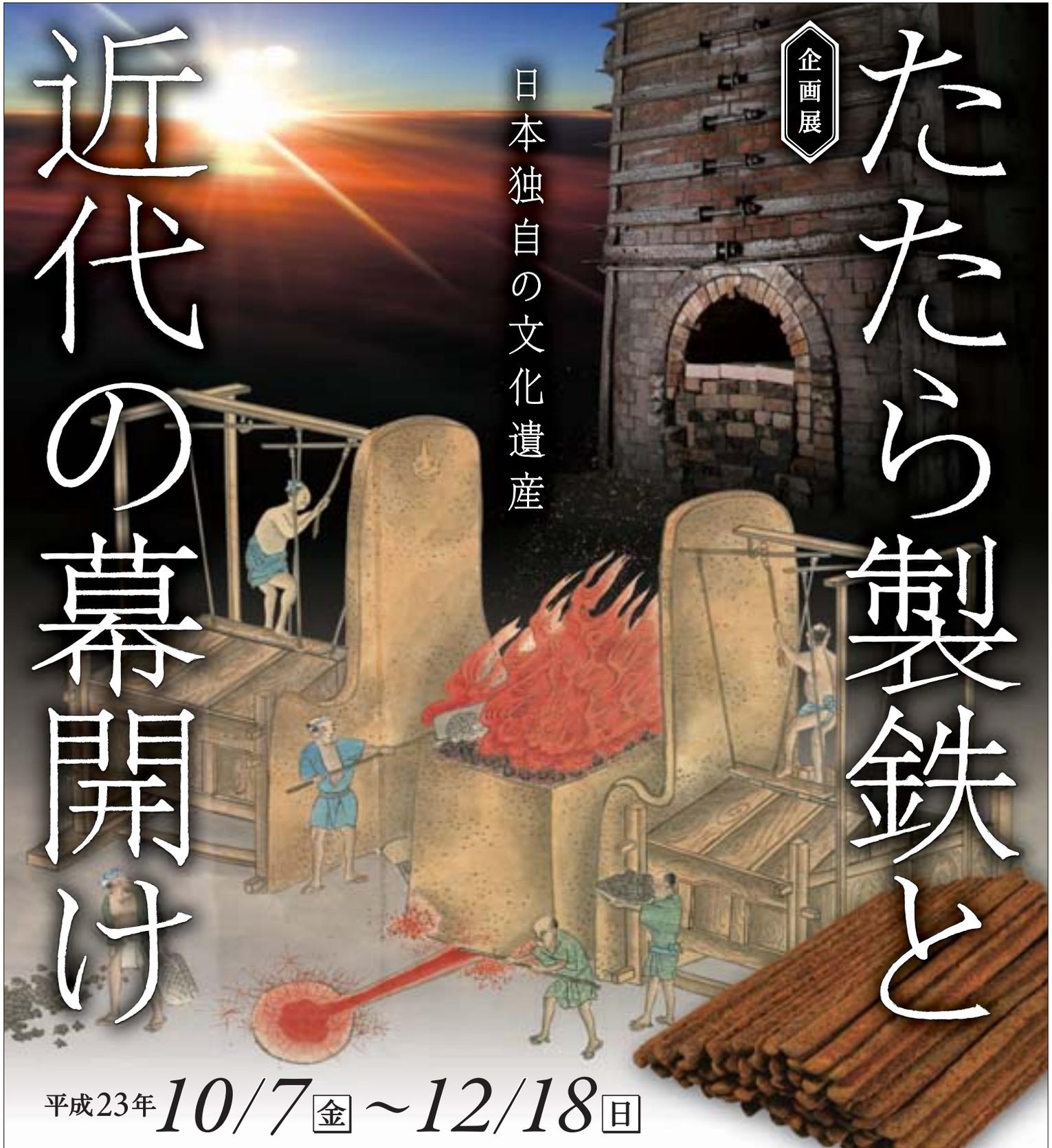
2011.AUG vol. 19

近代の幕開け

日本独自の文化遺産

企画展

たたら製鉄と



平成23年 10/7 金 ~ 12/18 日



たたら製鉄と近代の幕開け

たたら製鉄は、砂鉄と木炭を原料とした我が国独自の製鉄法です。その中心は良質な砂鉄と木炭に恵まれた中国山地にあり、幕末から明治初めの最盛期には国内の鉄生産量の9割を占めました。たたら製鉄は、開国に伴う安価な洋鉄の流入や洋式製鉄の本格化によって、次第に衰微し、大正年間には姿を消すこととなりますが、たたら製鉄が近代の幕開けに果たした役割について考えます。



(東京大学工学・情報理工学図書館工4号館図書館A)

第1章 たたら製鉄とは

砂鉄の採取、高殿鉦での鉄生産などの様子を工程ごとに描いた「先大津阿川村山砂鉄洗取図」を通して、たたら製鉄をわかりやすく解説します。

第2章 たたらの技術と経営

たたら製鉄の生産方法には、地域や経営者によって様々な方法がありました。石見の『金屋子縁記抄』、出雲の菅谷鉦、そして、明治時代に操業中のたたらを实地に調査した俄国一博士を通して、たたら製鉄の地域相を明らかにします。



俄国一博士／東京帝国大学教授。明治時代に中国地方のたたらを調査し、著書『古来の砂鉄製錬法』に詳細な記録を残す。

第3章 江戸から近代の民需と軍需

たたらで生産された鉄は、江戸時代には北前船で大坂から北陸まで広範囲に流通し、様々な製品に加工されました。幕末には軍事的緊張を背景に、たたら鉄が大砲の原材料として使われています。また、明治時代には、軍需物資である鉄を国内で確保する目的から、たたらで作られた鉄が海軍に納められ、軍艦の装備などにも使われました。たたら製鉄が、日本の近代化の中で果たした役割を考えます。

幕末・開国と鉄の需要

古代出雲歴史博物館 佐伯徳哉

1853年、浦賀にペリー率いるアメリカ艦隊が来航し、幕府に対して開国を迫るや、急速に大砲の需要が増大しました。特に、お台場（海防のために築造された砲台）に据え付ける大型の大砲鑄造が急がれるようになりました。幕府は、佐賀藩に対して鑄鉄製の大型の大砲製作を委託しました。すでに、佐賀藩は、幕府から長崎湾警備を命じられていたという事情によって、アヘン戦争で清国がイギリスに敗れたことを契機に、長崎湾に浮かぶ神ノ島・伊王島に砲台を築造しました。そのために他にさきがけて反射炉（鉄を大量に溶解することができる西洋式の炉）を築造し、鑄鉄砲の製造事業を大がかりに進めていました。その当時、佐賀藩は長崎に近く、長崎を通じて西欧の技術に接触しやすいという地の利にありました。

この鑄砲技術は、ペリー来航とともに、すぐに薩摩藩や水戸藩、幕府直轄領の葦山ほか全国に広がっていきました。その理由は、当時、銅に対して鑄鉄が安価であったことや、すでに西欧諸国が鉄製の大型の大砲を保有していたことなどによるといわれます。特に、佐賀や葦山では石見産の銑が用いられましたし、島津斉彬が主導した薩摩藩では、石見の製鉄技術者（鋼吹）が招かれました。

佐賀藩が幕府から委託をうけた鑄砲事業を継続していた1856年頃、石見国の幕府直轄領であった銀山領から佐賀へと多くの鉄が運ばれました。その際、大森（銀山）の代官所からは、佐賀藩領内の諸浦に対し鉄運搬の御用船が事故に遭った場合の援助が要請されるほどでした。



紙本淡彩『薩州見取絵図』のうち「磯別邸の図」

島津斉彬が主導して、鹿児島郊外に作られたコンビナート画面中央付近に反射炉（溶融炉）や高炉（溶鉱炉）がみえる（武雄市歴史資料館）

講座

近世後期における
たたら製鉄業経営の展開

■ 10月15日(土) 13:30~15:00
■ 鳥谷智文氏(松江工業高等専門学校 准教授)

たたら製鉄の地域的展開

■ 10月29日(土) 13:30~15:00
■ 角田徳幸(島根県古代文化センター専門研究員)

金屋子神の諸相

■ 12月3日(土) 13:30~15:00
■ 山崎 亮氏(島根大学法文学部教授)

〈場 所〉古代出雲歴史博物館 講義室
〈参加費〉無料
〈定 員〉100名
〈申込み〉電話・FAX・ホームページのイベント参加
フォームにて受付。定員となり次第、締切
とさせていただきます。

シンポジウム (予定)

テーマ
山陰地方の鉄生産技術と文化

■ 11月19日(土) 10:00~16:40
■ 日本鉄鋼協会シンポジウム、共同開催

〈申込み先〉「鉄の技術と歴史」フォーラム事務局
千葉工業大学 工学部 機械サイエンス学科
寺島慶一
FAX:047-478-0329
E-mail: keiichi.terashima@it-chiba.ac.jp

ギャラリートーク (予定)

学芸員による展示室内での解説です。

■ 10月8日(土)・22日(土)
11月5日(土)・12日(土)・26日(土)
12月10日(土)・17日(土)
いずれも 11:00~/14:00~(1日2回)
■ 常設展観覧料もしくはパスポートが必要です

イベント

鉄の歴史村出張実演
小だたら操業

炉づくりから鉚出しまで、5日間の工程を1日で実演します。

■ 11月3日(木)(文化の日) 9:00~15:00
■ 場所: 古代出雲歴史博物館プラザ(見学自由)

鉄の道文化圏関連イベント

岩田めぐみ
「たたら写真展」

■ 10月7日(金)~12月18日(日)
9:00~18:00(11月~ 17:00)
■ 企画展示室前(一部ギャラリー)
■ 企画展観覧料もしくはパスポートが必要
■ 協力: 財団法人日本美術刀剣保存協会



鉄の道
かけめぐり

■ 10月30日(日)
8:30~17:00(予定)
■ 鉄の道を角田徳幸氏と
一緒にめぐります。
■ 協力: 鉄の道文化圏推
進協議会

鉄製品を残す技

学芸員 澤田 正明



X線撮影装置



脱塩装置



各種道具



減圧装置

今回の企画展は「鉄」ということで、鉄の文化財に関するお話です。遺跡から発掘される文化財の中には、たくさんの鉄製品があります。長い間、土に埋まっていた鉄製品は、錆びてポロポロで、そのままにしておくと更に錆が進んでいきます。しかし鉄は、自然界で砂鉄や鉄鉱石（酸化鉄の塊のようなもの）として存在していますから、我々が「錆びる」と呼ぶ現象は、鉄にとって元の姿に戻ることであります。

そうは言っても、貴重な文化財が朽ちるのを見過ごすわけにはいきません。これらを後世に残し、研究や展示に活用できるようにする作業が保存処理です。

では実際に、出土鉄製品の保存処理とはどのようなことをするのでしょうか？

博物館と埋蔵文化財調査センターで行っている作業をご紹介します。まずは、観察と記録です。X線撮影装置や顕微鏡を使って状態をよく調べます。そして、この情報を手がかりにクリーニングします。筆や竹串、解剖用メスといった道具のほか、歯医者さんが使うような小型グラインダーや圧縮空気ですばやく粉を吹き付けるエアブラシで、慎重に土や錆を取り除きます。

錆の要因として水分と酸素のほかに、塩分が鉄を錆びやすくすることはよく知られています。出土鉄製品には土の中の塩分が含まれていますので、脱塩処理液に浸して溶かし出します。残る要因は、水分と酸素です。よく乾燥させた鉄製品に、溶剤で溶かしたアクリル樹脂を減圧状態で浸み込ませます。減圧することで細かな隙間の隅々まで入り込んだアクリル樹脂は、溶剤が乾いて固まると、ポロポロの鉄製品を強化できると共に、空気に直接触れないような被膜の効果が期待できます。最後に、折れて破片になってしまっているものは、接着剤を使って復元します。大刀などの鍛造製品は「三枚おろし」のように表面が剥離しますので、その接合作業は、まさに3Dパズルです。

このように保存処理をするのですが、現在の技術では劣化を止めることはできず、あくまでも劣化を遅らせるだけなのです。保存処理が終わっても適切な温度・湿度で保管し、たまに様子を見てあげます。こうした日ごろのメンテナンスを経て、企画展では材料から製品までたくさんの「鉄」が並びます。

[アテンダントからのお知らせ]

歴博パスポートが変わります！

会員の皆様につきましては、日頃からご支援を賜り誠にありがとうございます。

この度、皆様に歴博をより楽しんでいただけると共に応援していただけますよう、ミュージアムパスポートの見直しを実施する運びとなりました。

平成24年度1月からは新パスポート制度の開始を予定しており、特典につきましてもより魅力あるものにするため検討を始めております。

つきましては、来年に向けての新制度への移行手続きを円滑に行うため、ブロンズ会員を廃止させていただき、8月以降の更新・新規入会の皆様はパスポート会員のみとさせていただきます。

なお、8月以降に更新を迎えられるブロンズ会員様は、更新期限の延長措置をとらせていただき、今回の歴博ニュースは平成23年8月以降パスポート会員の皆様全員に送付させていただきます。来館ポイントは継続いたします。

皆様のご理解と、より一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

たくさんのダイコクさんに 会いにきませんか？

学芸員 矢野 健太郎

現在、テーマ展示室の大社コーナーで「ダイコクさんの歴史をたどる」というミニ展示を行っています。ダイコクさんといえばみなさんにもおなじみの神様だと思います。ただ、その歴史となるとご存知の方はそう多くはないのではないのでしょうか。

ダイコクさんの起源はインドの神様でマハーカーラという神様であったといわれています。マハーとは大きい、カーラとは黒いという意味で、「偉大な黒い神」という怖い神様だったのです。このため日本に伝えられたころのダイコクさんは、ムスツとした顔の神様でした。その後、ダイコクさんは「大黒天」と呼ばれるようになり、仏教の神様として信仰を集めるようになりました。そして、商業が盛んになった室町時代に入るとダイコクさんは福の神として信仰されるようになりました。その結果、ニコニコ顔で愛嬌のある姿と打出の小槌を持ったおなじみの大黒さんの姿として描かれるようになっていきました。

さて、日本には仏教の神様とは別に神社でまつられてきた日本古来の神様がいました。仏教の神様と神道の神様という2つの系統の神様がいるという状況から、日本では神道の神様は仏教の神様が別の姿で現れたものだという考え方が生まれました。こうした考えのもと出雲大社の大国主神は、大黒天の別の姿であるとされ、出雲大社は大黒天の総本社としてさらなる信仰を集めることとなりました。ただし、出雲大社のダイコクさんは大国主神なので「大国さん」と書きますし、描かれている姿も両手で赤い丸い玉を抱えているのが特徴で一般的なダイコクさんとは異なっています。

今回のミニ展示では、さまざまなダイコクさんとみなさんのおこしをお待ちしております。ぜひたくさんのダイコクさんに会いにきてください。
(展示期間：9月22日まで)



[まいぶんセンター通信]

島根県埋蔵文化財調査センター

埋蔵文化財調査センター こんにちは! 埋文です。

島根県埋蔵文化財調査センターでは、埋蔵文化財により親しんでもらうため一般の方を対象とし、「いにしえ倶楽部」と称する古代体験イベントを毎年数回開催しています。今年度は第1回目として、7月10日(日)に『古事記巡礼：黄泉の穴・パワースポット探訪』と題し、島根半島西部の神社や遺跡をバスで巡る見学会を企画しました。

見学会でめぐった探訪地は、近年パワースポットとして人気の韓竈神社や、風土記に記載された「黄泉の穴」として有名な国史跡猪自洞窟遺跡、海に面した祭祀遺跡である日御碕のひろげ遺跡、国譲り神話の舞台である稲佐の浜と鹿島神社旧社地（多芸志の小浜：現斐伊川河川敷公園内）です。当日は梅雨明け間もない夏空の下での開催で、参加された皆さんも最後はややへばり気味ではありましたが、無事に全行程を終えることができました。単なる流行りのパワースポットツアーではなく、専門家による遺跡や神社に関する詳しい解説付きということもあって、参加された皆様にも概ね満足いただけたようです。

いにしえ倶楽部では、秋に「(仮) 神々に捧げられた宍道湖のスズキ」と題して古代の釣りを宍道湖で体験するイベントを企画しています。詳細が決まり次第、下記ホームページにて掲載しますので、皆さんぜひご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

<http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>



稲佐の浜



韓竈神社

島根県内縄文遺跡の分布と変遷

テーマ研究 「縄文時代における山陰地域社会の展開」から

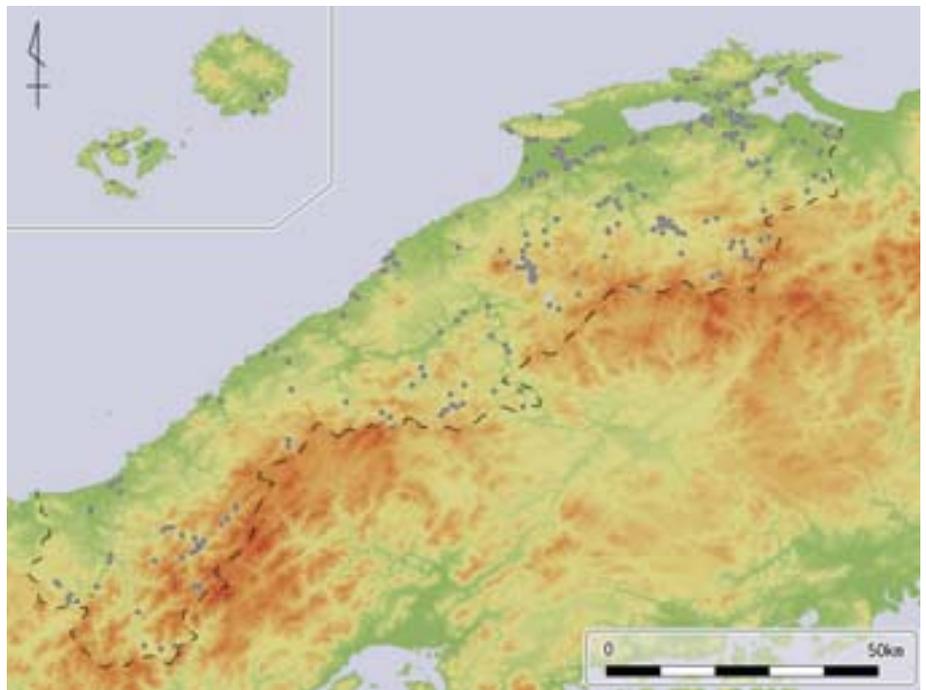
古代文化センター 柳浦俊一

みなさんは、島根県内に縄文時代の遺跡がどれだけあるのか、ご存知でしょうか。私たちが集計したところ、平成23年3月現在、島根県内には約600の縄文時代遺跡があることがわかりました。平成に入ってから飯石郡飯南町の志津見ダムや仁多郡奥出雲町・雲南市木次町の尾原ダム建設予定地内で縄文遺跡の発掘調査が相次ぎ、島根県内の縄文遺跡数は急増しました。これとは別に、益田市匹見町や鹿足郡津和野町でも遺跡の発見・発掘が行われ、県西部でも縄文遺跡は着実に増加しています。

遺跡数約600を数えるようになり、島根県は中国地方でもっとも縄文遺跡が多い県となりました。遺跡数が多いだけでなく、発掘調査によって得られた資料は質・量ともに豊富です。現在では、西日本の縄文時代を研究するためには島根県を抜きにしては考えられないといっても過言ではありません。

このような状況を受けて、島根県古代文化センターでは平成22～24年度の計画で、テーマ研究「縄文時代における山陰地域社会の展開」を実施しています。この研究では、①縄文集落の景観、②縄文時代の生活、③縄文時代の社会の復元を目標としています。

研究は、島根県内の縄文時代遺跡を集計することから始めました。この集計をもとに作成した遺跡分布が第1図です。これを見ると、縄文時代の遺跡は県内に万遍なくあるのではなく、いくつかの地域に集中することがわかります。①松江府西川津町から同美保関町にかけての島根半島東部、②仁多郡奥出雲町と雲南市木次町にかけての斐伊川上流域、③飯石郡飯南町志津見の神戸川上流域、④出雲平野、⑤益田市匹見町から鹿足郡津和野町にかけての地域、⑥隠岐郡、などに遺跡分布のまとまりがうかがえます。このまとまり程度の範囲が、当時の人々の日常的な生活圏だったのではないのでしょうか。



〈第1図〉島根県内縄文時代遺跡分布

島根県内の縄文遺跡は草創期から早期前半（約1万6千500年前～8千500年前）の遺跡もありますが、この間の遺跡は散発的で、出土した遺物の量もわずかです。土器や石器がまとまって出土するのは早期中ごろ（約8千500年前）になってからで、このころから本格的に県内での居住が行われたようです。しかし、早期後葉（約7千500年前）、前期末～中期初頭（約5千500年前）、後期中ごろ（約3千700年前）、晩期前葉（約3千300年前）に遺跡数の落ち込みがみられることから（第2図）、人々の当地への定着は右肩上がりに順調ではなかったようです。



〈第2図〉島根県の縄文時代遺跡数の推移

第2図からは、増加と減少をくり返しながら、次第に各地に定着を指向していった様子うかがえます。

浜田市を境にして、それより東側と西側では土器の様相が大きく違います。東側では瀬戸内・近畿地方と、西側では山口県・東北九州と似た土器型式です。これは、当時の人々の領域観を示していると考えられます。縄文時代の人々は、浜田市付近を活動領域の境界として強く意識していたのかもしれない。

「さんいんさんぽ」

「歴史・資料の宝庫」 ～米子市立山陰歴史館/鳥取県米子市～

米子市立山陰歴史館は米子市の中心部にあり、国道9号に面しています。歴史館は、昭和5(1930)年米子市庁として建設された、鉄筋コンクリート・赤れんが(スクラッチタイル張り)の3階建てで、米子市の指定文化財となっている重厚な建物です。

現在、米子市教育文化事業団が指定管理者となり、館長と2名の学芸員が管理運営をしています。

山陰歴史館は大正13(1924)年、郷土史家の足立正氏が二十数年にわたり収集され、それを展示した山陰徴古館を始まりとし、昭和15(1940)年、足立正氏の寄託された品をもとに、歴史研究と国民精神の^{かんよう}涵養に資する目的で、米子市立山陰歴史館が創設されました。

米子は応仁の乱の時(1467年)、現城山に砦が築かれ、町として次第に発展しました。尼子氏を征した毛利氏の武将吉川元春・広家によって築城が開始され、関ヶ原合戦(1600年)の後、駿府から移ってきた中村一忠と家老横田内膳により、本格的な町づくりがなされました。江戸時代は、因幡伯耆の大名池田氏の家老荒尾氏による支配が明治維新まで続きました。

吉川氏までの中世の史料は所蔵していませんが、中村氏系図や江戸時代の城郭絵図、城下町絵図、田畑地続図、元和4年の検地帳をはじめとする^{なよせ}名寄帳、宗門改帳等の村方文書、竹島関係の大谷家の古文書、西田税などの史料を多数所蔵し、展示と研究の資としています。

また鳥取、島根の郷土関係の参考文献も充実しています。



外観

【平成23年度の展示及び活動】

常設展示 江戸時代の米子展(武具や絵図)/昭和時代の暮らしや学校展/西田 税展

企画展 戦争の記憶展 8月6日(土)～8月19日(金)
米子市馬場八幡宮所蔵の三十六歌仙展(予定)
大山寺縁起絵巻展(予定)

講座 郷土の民話を聞く会 9月18日(日) 13:30～
素鳳人形コレクション展(予定)

米子市立山陰歴史館

〒683-0822 米子市中町20
TEL:0859-22-7161 FAX:0859-22-7161

Email: saninrekishikan@dear.ne.jp
HP <http://yonagobunka.net/rekishi/>
開館時間 ●9:30～18:00(入館は17:30まで)

休館日 ●毎週火曜日(祝日の場合は翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)

入館料 ●常設展無料
企画展・特別展は別途料金が必要です

駐車場 ●市営駐車場をご利用ください。(2時間無料)



展示室の様子

企画展 **スケジュール**
2011-2012

岡山県交流展
特集展 **備前焼展** —土と炎の芸術—

2011年12月28日(水) ▶ 2012年2月26日(日)

備前焼の900年に渡る歴史を、岡山県立博物館の館藏品を中心に一堂に展示します。また人間国宝の作家達の作品もあわせて展示します。島根県と岡山県との文化交流事業として開催します。



開館5周年記念
古事記編纂1300年記念事業 4館連携企画「炎の力」協賛事業
企画展 **青銅器に魅せられた人々**

2012年3月16日(金) ▶ 5月16日(水)

国宝・荒神谷遺跡出土青銅器、加茂岩倉遺跡出土青銅器群は、出雲の古代文化を象徴するものとして知られています。しかし、その圧倒的な量は、政治権力の大きさと単純に結び付けられるものではありません。青銅器とそれをを用いる祭祀が浸透していく中で、弥生人は様々な手法で青銅器を取り入れ、地域独自の「青銅器文化」ともいべき新たな世界を見いだしました。この展覧会では、各地に花開いた「青銅器文化」を比較しながら、銅鐸・銅剣の大量保有に至った出雲における「青銅器文化」の姿を明らかにします。また当時最新技術であった青銅器製作技法を手がかりに、数々の困難の中で、それでもなお青銅器を求めた人々の想いを紐解いていきます。

イベントスケジュール

2011年 10月14日(金)~16日(日)	銅鐸記念日 〈銅鐸おさわり体験、銅鐸製作実演〉
2011年11月3日(木)	秋まつり 楽しいイベント計画中です。
2011年 10月1日(土)~11月30日(水)	ブロンズネットワーク4館 古代出雲の至宝スタンプラリー 〈古代出雲歴史博物館、加茂岩倉遺跡ガイダンス、荒神谷博物館、出雲弥生の森博物館〉

「神々の国しまね」の情報発信舞台です。
古代から ▶▶▶ 2011 ▶▶▶ 2012 ▶▶▶ 2013 ▶▶▶ 未来へ 古代出雲歴史博物館

お客様の声 から

当館では、来訪される様々な方からのアンケート、アテンダント等への要望をもとに、より気持ちよく利用ができるよう、検討・改善を図っています。4月以降にいただいた『声』のうち、主なものについて回答を掲載させていただきます。(アンケート等でいただいたご要望については、一部簡略化して掲載しています。)

本物が複製かわからないので、ぱっと見てわかりやすくしてほしい。
一部の展示物は、調査や保管のため、やむを得ず複製文化財を展示している場合があります。展示物によっては、ご指摘のとおり、よく確認しないと複製文化財なのか本物なのかかわからないものがあり、今後も、できる限りわかりやすく展示できるように、さらに工夫を重ねていきたいと考えています。

この博物館は英語などの外国語表記がありません。外国語があった方がいいのではないかと思います。
当館へ来訪される方は国内の方がほとんどであるため、今まで外国語表記はチラシ等に限定していました。しかし、「神々の国しまね」事業や出雲大社正遷宮を迎え、外国からの多くのお客様の来館が予想されることから、対応可能な案内板等から外国語(英語・中国語・韓国語)表記を追加していくことにいたしました。

今後も、来館される様々な方に親しまれる博物館を目指して、意見をお聞きしたいと考えています。ホールに設置しているアンケートや館内のアテンダントを通して、気がついたことをご知らせいただければ幸いです。

発行/平成23年8月



島根県立古代出雲歴史博物館
Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL.0853-53-8600(代) FAX.0853-53-5350
URL : <http://www.izm.ed.jp> E-mail : contact@izm.ed.jp
開館時間 9:00~18:00(11月~2月は、9:00~17:00)



マスコットキャラクター 雲太くん



マスコットキャラクター 出雲ちゃん